

# 佑啓

## 心意気

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

### 堀金 兼太郎

この業界で働いていると、他の人よりもバラエティーに富んだ体験をする機会が多いのではないかなと思うことがある。例えば、作業活動。「福祉」のいろはも解らぬうちから、気が付けばエンジン式刈払い機やらチェーンソーを使つて山を刈り、畑に行けばトラクターを駆る。農業でもないのに本気で野菜や花を育てる。気が付けばダンブカーやフォークリフトも操ればバスの運転もお手のもの。はたまた利用者さんと楽しむ各種イベント。私は特段、アウトドア志向はないがバーベキューの火おこしなどに対する苦労は感じない。流しそうめんなんて、夏の風物詩のように言われているが、実際に体験したことがある人はどれほどいるのだろうか。ましてや自分で竹を切つてそうめんを流す側となるとそんなないないのではないかな。私も職場に入って初めて経験したクチである。今では、若い職員が夏のイベントに悩んでいると「流しそうめんやろうよ」と口走つてしまう。だが、一步職場を出れば、流しそうめんもバーベキューも休みの予定には入らないし、休みの日にキャンプ場へ出かける

タイプの間ではないのだ。なので、もちろん我が家族も同じような人種である。そして私もそういう家庭で育つた。核家族で引越歴多数、特段両親の実家が「地方のどこか」でもない。代々受け継がれたものもなければ、地元の繋がりとこの希薄な環境だった。加えて、個人的にも引つ込み思案で人見知りなもので、与えられたらやるけど自分からは進んでやらないのである。

そんな私が、最近楽しみにしている風物詩がある。「神輿を担ぐ」これも一見、福祉とは無縁に思われるでしょう。そして、実際担いだことありますよって人は意外と少ないのではないかと思っている。今では私だけではなく佑啓会にとつて大きな楽しみの一つになっている。

ことの始まりは、佑啓会が文京区に開所した「ふる里学舎本郷」にある。その地には縁もゆかりもない私たちは準備から開設に至るまで「ちよつと浮いた」存在だったかと思う。佑啓会？障害者施設？パンを作る？と、ハテナ尽くし。何か、地域の方々と距離が近付くものはないかと思案していた

ところ、町会の方から毎年行われるふる里学舎本郷のお隣、「三河稲荷神社」の例大祭で神輿を担がないかとお誘いをいただいた。これは好機！と思い「何でもやります！是非参加させてください！」と威勢よく言ったものの、思い返してみれば、神輿なんて担いだことではないのだ。まあそれでも何とかなるさ、ウチの法人全体に声をかければ経験者もいるだろうし、そこそこお手伝いにも来てくれるだろう、と早速募つたところ、遠くは南房総から老若男女合わせて三十人近くが参加してくれることになった。だが、どう見ても「神輿のことならお任せあれ！」という達者はおらず、良くても小さい頃に子供会でちよつと担いだことがあるとかで、殆どは未経験者であつた。それでも私にとつてはとも心強く、ふる里学舎本郷オーブンの景気づけにと駆けつけてくれる心意気が何よりも嬉しかった。

よし、頑張るぞと気合を入れて、まずは形からだよね、ということ専門店に行つて、股引(ボトムス)と鯉口(アンダーシャツ)と地下足袋を買つた。股引なんて履いたことがないから、ユーチューブを見て本番まで何度も着方を練習した。なんかわからないけど、見てくれを整えただけで、何となく自信が湧いてきた。

例大祭当日、東京に配属の職員は担ぎ手に先駆けて、もう一つの大切な役目がある。それは例大祭の準備にも携わらせていただくこと。神酒所の設営や神輿や山車を蔵から運んだり、といつても全くの素人である私たちは、地元の重鎮の方々の号令に従つて右へ左へ動き回るのだ。神輿を担ぐだけで

は、いよいよ、これも貴重な体験である。いよいよ、我が佑啓会の担ぎ手の到着。そこでまたまた嬉しいことが一つ。殆どの職員がその日に向けて、私と同じように祭りの装いを準備していたこと。どうせやるなら本気でと、皆が卸したての鯉口に股引、地下足袋で参上。普段、なかなか会えない仕事仲間でも、同じ思い、同じ熱量でいてくれることに胸が熱くなる。



三河稲荷神社例大祭での1枚

それから八年。コロナ禍には途絶えた例大祭も昨年からは復活し、今ではふる里学舎本郷だけではなくふる里学舎蔵波でも同様の活動が定着している。年に一度しか会わない人たちでも顔をあわせれば、「久しぶり」「今年もよろしく」と声をかけてくれると嬉しくなる。さしたる地元も田舎も持たない私は、心のどこかで土着的なものに憧憬の念があるのかもしれない。

来年度から、入所施設やグループホームには「地域連携推進会議」が義務化される。簡単に言うが、定期的な外部の目を入れる必要がある。それにより運営の質が確保されることが目的だそう。そのためには年に一度の見学会や運営状況を報告する会議を設けることになる。通所も居住も結局は運営する母体の気質だと思つた。昨今の報道では全国的な展開をみせるグループホームによる、不適切な支援や運営が発覚する事例も散見される。結局は組織としての「経営」理念がそうさせているのではないかな。佑啓会は色々な地域で様々な事業を運営しているが、地域の方々と交流はマスターだと考えている。しかつめらしい会議など開催しなくても、日頃から施設にパンを買いに来てくださり、イベントを開催すれば多くの方がお越しいただいて、施設の中を見ていただいている。何よりそこで暮らす利用者の表情や、職員の様子を見ただけならば、ご理解いただけるのではないかなと思う。

で、いざ神輿を担ぎ始めたら、同じ思い、同じ熱量をもってして、もリズムはバラバラ、歴戦の担ぎ手の方々にしたら迷惑極まりない集団と化してしまつた。それでも半日程文京区のビル群の中を練り歩き、途中の休憩所ではお酒をいれながら、他の担ぎ手の方々、地域の方々とお話をする機会もいた。無事に終了。その後は直会(なおらい)と読む。こんな言葉も知らなかった。では、地域の飲食店さんのご協力で美味しい料理やお酒をいただき、皆さんと楽しいひと時を過ごさせていただいた。神輿を担ぐことに気が向いてしまつていたが、気が付けば所期の目的である「地域の方々と交流」は無事にどこか盛大に遂げている。同じ思い、同じ熱量を地域の方々と共に共有できたことで街の仲間入りができたのではと、ひとり勝手に感動していた。

これには入所している子供も大人も、職員も大喜び。地域のためとか、利用者のためとか、お題目として掲げるのも良いけれど、自分たちも楽しむということとがまず大事なんじゃないかなと思う。



蔵波八幡神社例大祭  
ふる里学舎蔵波での1枚

神輿初心者だつた我々も、今では自前の帯やら小物入れなどを身に着ける者や底にエアの入つた足袋で気合十分な者が増えていく。笑顔で元気に神輿を担ぐ若手職員、ちよつとだけ担いで休憩所では一番元気に酒を飲む年配職員がいて、翌日には筋肉痛と肩の痛みが襲ってくる。タイプやコスパの世の中で、人手も時間も体力も使つて、あんな重たいモノを一日中担ぐ。効率重視の昨今、非効率はある種の贅沢でもあり、そんな休日があつていいと思う。じゃあ何が楽しいのって聞かれると・・・達成感？爽快感？一体感？まあひつくるめてあの場に漂う空気がいいのだ。

そういつたことを楽しいと思える人が、こういう業界に向いているのかもしれない。そして佑啓会はいつてもそんな空気が溢れている。

(ふる里学舎浦安 施設長)

